慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	弘法大師伝を語る媒体 : 絵巻・ 版本・ 曼荼羅に注目して
Sub Title	Mediums for narration of the great achievements of Kobo-daishi : focus on the picture scroll, the printed books, and the Mandara
Author	西, 弥生(Nishi, Yayoi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.87, No.3 (2018. 2) ,p.1(225)- 32(256)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20180200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

弘法大師伝を語る媒体

――絵巻・版本・曼荼羅に注目して――

西　弥生

はじめに

平安時代以来、真言宗は世俗社会の人々の様々な所願を受け止めながら、存続と発展を遂げてきた。聖俗両社会の関係に焦点を当てて、真言宗の存続のあり方を時系列的に大枠で辿るならば、次のような流れが見てとれる。

古代・中世の真言宗は東寺長者を頂点とする体制のもと、教相（教義の研究）と事相（教義に基づく実践としての祈祷）を軸とする宗教的活動を展開しながら存続した。特に平安院政期以降、現世利益と鎮護国家に対する期待を背景に、真言宗は事相を前面に掲げて政治権力との密接な関係を構築し、発展を遂げていった。中でも真言密教の嫡流を標榜する醍醐寺と仁和寺は、祈祷の主力寺院となり、東寺を凌駕する勢いで興隆した。

公武権力をはじめとする上層階級との関係に主に依拠していた古代・中世の真言宗は、例えば踊念仏のように庶民にも平易な教化の術を強調することなく存続してきた。応永年間には東寺南大門前に茶屋が設けられ、参詣人を含む往来の人々に茶売りが行われて[1]、東寺と庶民との距離が縮まったようにも見えるが、東寺をはじめとする京都の真言宗寺院が勤修してきた主要な祈祷は公家・武家からの要請によるものであった。

真言宗の中枢寺院に庶民信仰としての色彩が顕著に表れるのは江戸時代に入ってからである。新見康子氏によれば、東寺の講は江戸時代に既に成立しており、御影堂の参道に並ぶ石燈籠からそれをうかがうことができるとされる[2]。こうした庶民信仰としての発展は、真言宗の事相や教相に対する直接的な関心によるものというよりも、

むしろ宗祖である弘法大師信仰による部分が大きいと考えられる。

現代においても、東寺では空海の命日である二十一日に毎月「弘法さん」と呼ばれる縁日が開催され、関西地域のみならず全国から多くの人々が訪れるという。[3] また、関東地方においても、「西新井大師」（真言宗豊山派総持寺、足立区西新井）や「川崎大師」（真言宗智山派平間寺、神奈川県川崎市）などは、特に年末年始になると多くの参詣客で賑わう。その他、空海が修行した跡を辿って四国に点在する八十八箇所の霊場を巡拝する四国遍路などによる弘法大師空海と人々との接点は、それが明確に意識されているか否かはさておき、今も息づいているといえる。

こうした真言宗の大きな歴史的流れの中で、体系的な真言密教の教義を遺した空海の人物像が伝えられてきた一方で、多くの弘法大師伝説が生み出され、のちに「お大師さん」として親しまれる空海像が形成されていった。真言宗に庶民的色彩が加わっていく流れの中で、弘法大師をめぐる伝承が果たした役割は大きいであろう。

そこで本稿の目的として、弘法大師伝がいかなる媒体によって、どのように語られてきたのかを跡づけることにより、古代・中世から近世・近現代へという大きな時代の流れの中で、真言宗がいかにして信仰の裾野を広げ、存続を図ろうとしてきたのか、その一端を明らかにしたい。

そのための素材として本稿では、南北朝時代に成立した弘法大師伝絵巻である「弘法大師行状絵」（東寺蔵）を軸として用いることとする。[4]

「弘法大師行状絵」の詞書には史実とは言い難い伝説も盛り込まれている。こうした史料的性格も一因となってか、「弘法大師行状絵」は歴史学の研究素材としてはあまり活用されてこなかった。しかしながら、絵巻に語られる伝承や知識・情報体系は、直接的あるいは間接的に関わる人々や組織と一体化した一つの社会システムとしてとらえるべきものであって、そのシステムがどのように生まれ機能したのかを考えることは、真言宗史の解明にとって少なからず意義があろう。そこで、情報史の視点に立って「弘法大師行状絵」に盛り込まれた伝承を扱っていくならば、歴史研究の素材として有効に活用できるのではないだろうか。

以上のような問題意識と研究素材に基づき、第一章では情報史の視点に立った「弘法大師行状絵」の研究方法

について具体的に検討する。第二章では、弘法大師伝を語る媒体派生の過程について、絵巻を起点に考察する。第三章では、個々の場面における内容の変化を見ていく。

なお、弘法大師信仰の広がりを表すものは文献・絵画・彫刻など多岐にわたるが、これらを網羅的に扱うことは難しいため、本稿では絵巻とそれをもとに生み出された版本・曼荼羅に限定して考えることとしたい。

第一章　情報史の視点からの絵巻研究

情報という概念は多分野にまたがって定義づけがなされ、これまで様々な観点から研究対象とされてきた。[5]その中で、日本中世史・近世史においても情報史に対する関心が寄せられてきた。

例えば『歴史学研究』では、「情報と歴史学」というテーマで、「情報という概念を各人の歴史研究の中にどのように有機的に組みこむか」という課題意識に基づく特集が組まれた（一九九一年）。[6]また、歴史学研究会の一九九八年度大会・中世史部会では、「中世社会における情報の受容・変成・蓄積」がテーマとして掲げられた。[7]さらに、立教大学で開催された公開シンポジウム「歴史における物語と情報」の成果が、『立教大学日本学研究所年報』（二〇〇六年）にまとめられている。[8]

このように幾度かにわたって情報史がクローズアップされてきたわけであるが、これらの先行研究のうち、情報史の可能性に関する西岡芳文氏の重要な指摘のいくつかを挙げてみたい。

まず、論文①「『情報史』の構図―日本中世を中心として―」では、「『情報』の視角をとることによってもたらされる歴史学上の新しい視点は、過去の人間の知的営為を体系的に把握しうる可能性である」とされる。[9]

論文②「日本中世の〈情報〉と〈知識〉」では、「『情報』の概念を、単なるコミュニケーションのみに狭めないで、知的営為の総体まで拡張し、一つの時代の思考のパラダイムを再現すると同時に、その時代に生きた知識人たちの位相を明らかにすることは、文化の流れを新たな視点でとらえ直し、時代のもっていた隠れた可能性に光を当てることでもある」とされる。[10]

論文③「富士山をめぐる知識と言説―中世情報史の視点から―」では、「『情報』というものを歴史の中で考えるとき、そのようなひとつの空間の中で伝達される情報というものと、もうひとつ、通時的に時代を超えて伝えられる『情報』（これは諸々の分野で『伝承』という語

で表現されると思いますが）という側面もある」とされる。[11]

日本文化が時代から時代へ、また人から人へと受け継がれてきた実態を明らかにし、文化を今後いかに継承していくべきかを考える上でも、西岡氏が指摘されるように情報という視点に立った歴史的考察の意義は大きいであろう。

そこで本稿では、時代を超えて伝えられた情報の一例として、弘法大師伝とその普及媒体を取り扱う。主な考察対象とする「弘法大師行状絵」は、詞書の素材の大部分が判明するという点で稀有な絵巻であり、また中世から近世、近現代と時代を経る中で、新たな媒体を派生的に生み出している点でも注目される。つまり、「弘法大師行状絵」は長い時代の流れの中で、情報のあり方を追うことのできる好素材なのである。

しかしながら、信憑性の低い伝承も多く盛り込まれた素材を扱う上で有効な視点や手法については、未だ検討の余地が多く残されている。情報・知識は、発信・教授する側に立てば「伝達」するもの、受容する側に立てば「獲得」あるいは「習得」するものであるが、こうした一般的な見方からさらに視点を広げ、より多角的に知識体系を分析するためにはいかなる視角が必要であろうか。以下、今後の具体的な検討課題を整理しておきたい。[12]

第一に、弘法大師伝を扱う主体の問題である。弘法大師伝を記す媒体の生成・管理と普及にいかなる立場の人々が、どのように関与していたのかを考える必要がある。

第二に、弘法大師伝の公開性についてである。弘法大師伝を記す媒体は、どれほど公開されていたのか、寺院社会側から発信された伝承はいかにして世俗社会と共有されたのかという問題が挙げられる。[13]

第三に、弘法大師をめぐる個々の伝承の内容をふまえた上で、それらがどのような場において生成され、いかなる地域に普及されたのかということについても注目していく必要がある。

第四に、人の動きとの関連性についてである。弘法大師伝の主な生成場所の一つは京都と考えられるが、特に近世以降になると、都鄙間における人の動きとそれに伴う人的交流が活発化した。つまり、各地に伝わる様々な伝承が相互に影響を及ぼしたことが想定できるのであり、それが弘法大師伝を記す媒体の派生にいかに作用したのかを検討しなければならない。

第五に、弘法大師伝の編纂過程について、いわゆる情報処理という視点からの検討の必要性である。編纂の中には調査・校訂・注釈・批評などの要素も含まれる。弘法大師伝が絵巻としていかに編纂されたのか、その一端については前稿において検討を行った。[14]

第六に、弘法大師伝の進化の問題である。弘法大師伝を記す媒体が派生していく過程で、複数の伝承から構成される個々の媒体がもつ枠組み自体が変化するという現象が見られるかどうかという点や、伝承の内容に変化が生じているかどうかという点についても注目していく必要があろう。

第七に、弘法大師伝と寺院経済との関連性である。弘法大師伝は、近世には版本として商品化され、また寺院の勧募活動とも関わりをもちながら普及が進められた。よって、出版事情と寺院経済との関係性についても見ていく必要がある。

以上が今後の具体的な検討課題である。本稿で全てを明らかにすることは難しいが、弘法大師伝という情報体系を扱うにあたって有効と思われる視点として挙げておく。

以下、第二章では弘法大師伝を普及するために生み出された「媒体」に注目し、その展開を追う。第三章では各媒体に盛り込まれた「個々の場面」に注目して、内容変化の実態を辿ることとしたい。

第二章　媒体の派生

東寺において絵巻「弘法大師行状絵」が制作されたのは南北朝時代であるが、弘法大師の伝説化の始まりはそれよりも遡る。武内孝善氏は十世紀までに成立していた伝記として『続日本後紀』承和二年（八三五）三月二十五日条、『贈大僧正空海和上伝記』、『遺告二十五ヶ条』、伝真済撰『空海僧都伝』、『金剛峯寺建立修行縁起』を挙げられ、弘法大師の神秘化・伝説化は既に九世紀末からはじまっていたと指摘されている。[15]弘法大師伝絵巻はその延長線上に位置づけることができ、江戸時代になると絵巻からさらに派生して版本や曼荼羅という新しい媒体が登場した。これらの新しい媒体はしばしば弘法大師の御遠忌に合わせて生み出されており、御遠忌の盛り上がりと一体化した弘法大師伝の流布を狙ったものとみなされる。

そこで、まずは絵巻の系譜を見ておきたい。東寺蔵「弘法大師行状絵」とそれに先行して生まれた諸本に関

して、梅津次郎氏は以下のように分類されている。[16]

第一系統：「高祖大師秘密縁起」（十巻本）安楽寿院所蔵、十三世紀成立か[17]

第二系統：「高野大師行状図画」（六巻本）高野山地蔵院所蔵、十三世紀後期成立か

第三系統：「高野大師行状図画」（十巻本）白鶴美術館所蔵、十四世紀成立か

第四系統：「弘法大師行状絵」（十二巻本）東寺所蔵、十四世紀後期成立

第三系統「高野大師行状図画」は第二系統の増補本とされる。本稿で扱う東寺本は第四系統とされており、弘法大師伝絵巻の系譜の中では終盤に位置するものである。なお、上記四つの系統に加えて、第五系統として版本「高野大師行状図画」（十巻本、個人蔵、十六世紀刊）があるという。

本稿で扱う東寺系統の絵巻・版本・曼荼羅の全体構成は【表1】の通りである。A欄には十四世紀成立の絵巻「弘法大師行状絵」、B欄には天保四年（一八三三）の版本「弘法大師行状記」の構成を、そしてC欄には明治十二年（一八七九）成立の「弘法大師行状曼荼羅」の構成を記載した。

以下、絵巻・版本・曼荼羅それぞれの成立について見ていくこととする。

○十四世紀成立の絵巻「弘法大師行状絵」

東寺蔵「弘法大師行状絵」については主に美術史の観点から研究が進められてきた。主要な先行研究としては、梅津次郎氏「東寺本弘法大師絵伝の成立」[18]、宮次男氏「東寺本弘法大師行状絵巻―特に第十一巻第一段の成立をめぐって―」[19]、同氏「東寺の弘法大師行状絵巻について」[20]、塩出貴美子氏「角屋本『弘法大師行状絵巻』再考―東寺本との図様比較を中心に―」[21]などがある。これらの研究成果により、東寺本系統の諸作品について、相互関係や図様の変遷、制作背景などが明らかにされてきた。

一方、歴史学の観点からの研究は美術史に比べて少ないが、新見康子氏「東寺所蔵『弘法大師行状絵』の制作過程―詞書の編纂を中心に―」により、「編纂」という新たな研究視点が提示された。[22]

新見氏の研究成果をふまえ、拙稿「描かれた東寺の灌頂―東寺蔵『弘法大師行状絵』の一齣―」では、東寺本にのみあって他系統にはない「東寺灌頂」の段に注目し、東寺本の特性について検討を試みた。[23]また、拙稿「東寺

蔵『弘法大師行状絵』の詞書―観智院賢宝の編纂意図―」では、詞書と典拠文献との比較や、先行諸本との比較、詞書における強調点などについて検討することにより、いかなる意図のもとで東寺本「弘法大師行状絵」が編纂されたのかを探った。[24] その結果、この絵巻は弘法大師空海の生涯という枠を超えて、東寺一門すなわち真言宗の歴史を語った絵巻としての性格をもつことを指摘した。

また、文献史学と美術史学の接点をなすものとして「弘法大師行状絵」を扱い、「東寺灌頂」の段の灌頂行列図に注目しながら絵巻制作の素材について論じられた藤原重雄氏「東寺本『弘法大師行状絵巻』の灌頂行列図」がある。[25]

東寺蔵「弘法大師行状絵」の成立時期については、既に先行研究によって明らかにされている。[26] 新見康子氏によれば、詞書の下書が完成した時期については、応安七年（一三七四）から永和四年（一三七八）までの間と考えられ、清書の完成は永徳年間（一三八一～一三八三）まで下る可能性が高いと指摘されている。[27] また、「大師御絵用途注文」には応安七年（一三七四）から康応元年（一三八九）までの十六年間にわたる制作費用や、絵師への下行分が記されており、[28] かなりの年月が絵巻制作に費やされたことがわかる。

本絵巻の成立と弘法大師御遠忌との関係については、管見の限りでは史料上に記載が見出せず定かでないが、制作途中であった至徳元年（一三八四）は弘法大師五百五十年御遠忌の年であり、本来は御遠忌に間に合わせるつもりであった可能性も考えられる。巻十一第一段「東寺灌頂」の絵は初め宮廷絵師巨勢久行が描いたが、その後巨勢行忠によって描き直しがなされており、[29] そうした事情もあって予想以上に制作に月日がかかり、結果的に御遠忌後の完成になってしまったのかもしれない。

編纂の中心人物については、応安六年（一三七三）「学衆方評定引付」十二月二十九日条によれば、[30]「大師御絵奉行事」として、「云故法印（宝）素意、云当時器用、可為観智院（賢宝）僧都由、牒供僧方年預可■（被カ）送賢宝僧都之由、評議了」とあるように、東寺の学僧として著名な観智院賢宝が編纂作業を主導したことが確かめられる。

具体的な制作作業についてみれば、詞書の撰述は賢宝自身が行ったが、清書は大覚寺二品親王深守・一条公勝・六条有孝・二条為重・四辻善成・成就院杲守・霊山僧正実厳・大炊御門三位入道明燈・青蓮院無品親王道円

【表 1】 絵巻・版本・曼荼羅の構成

A 絵巻「弘法大師行状絵」14 世紀成立			B 版本「弘法大師行状記」天保 4 年(1833)刊行			C 弘法大師行状曼荼羅　明治 12 年(1879)成立					
巻	段	標題	巻	段	標題	幅	場面	標題	幅	場面	標題
巻 1	1	(誕生霊瑞)	巻 1	1	誕生霊瑞	第 1 幅	1	入胎誓願	第 3 幅	1	仁王経法
	2	(童稚奇異)		2	童稚奇異		2	誕生奇特		2	東大寺蜂
	3	(四王侍衛)		3	四王侍衛		3	幼稚遊戯		3	真如親王
	4	(俗典鑽仰)		4	俗典鑽仰		4	俗典鑽仰		4	観法無导
	5	(出家学法)		5	出家学法		5	誓願捨身		5	神道灌頂
巻 2	1	(登壇受戒)	巻 2	1	登壇受戒		6	四王執蓋		6	合體霊像
	2	(聞持修行)		2	聞持修行		7	明敏篤学		7	高雄灌頂
	3	(室戸伏龍)		3	室戸伏龍		8	入京勤学		8	川越之額
	4	(金剛定額)		4	金剛定額		9	聞持受法		9	南円堂鎮
	5	(老嫗授鉢)		5	老嫗授鉢		10	仏門勤学		10	勝地福田
	6	(虚空書写)		6	虚空書写		11	大滝飛劔		11	二人弟子
	7	(釈迦湧現)		7	釈迦湧現		12	室戸伏龍		12	大峯修行
	8	(久米感経)		8	久米感経		13	老嫗授鉢		13	小児蘇生
巻 3	1	(渡海入唐)	巻 3	1	渡海入唐		14	桂谷降魔		14	龍泉涌出
	2	(大使替書)		2	大使替書		15	出家受戒		15	了知牛語
	3	(長安奏聞)		3	長安奏聞		16	戒壇受法		16	日想観法
	4	(存問勅使)		4	存問勅使		17	釈迦湧現		17	江嶋弁天
	5	(青龍受法)		5	青龍受法		18	久米感経		18	禅僧与油
巻 4	1	(珍賀懺謝)	巻 4	1	珍賀懺謝		19	龍田老姥		19	恵日草創
	2	(修円護法)		2	修円護法		20	聞持修行		20	霊山結界
	3	(図像写経)		3	図像写経		21	明星入吐		21	高野尋入
	4	(恵果附属)		4	恵果附属		22	金剛定額		22	稲荷誓約
	5	(石碑建立)		5	石碑建立		23	朽橘再生		23	皇帝御祈
	6	(多生誓約)		6	多生誓約		24	勅許入唐		24	三鈷宝劔
	7	(宮中壁字)		7	宮中壁字		25	入唐祈願		25	秘鍵開題
	8	(流水点字)		8	流水点字		26	入唐著岸		26	権者自称
	9	(梵僧授経)		9	梵僧授経		27	封検舟舩		27	応天門額
巻 5	1	(三鈷投所)	巻 5	1	三鈷投所		28	旅館賜饗		28	二荒日光
	2	(帰朝奏表)		2	帰朝奏表		29	長安入儀		29	両部神道
	3	(灑水生樹)		3	灑水生樹		30	勅西明寺		30	東寺勅賜
	4	(久米講経)		4	久米講経		31	五筆勅号		31	皇帝灌頂
	5	(大内書額)		5	大内書額	第 2 幅	1	流水書字	第 4 幅	1	稲荷勧請
	6	(清涼宗論)		6	清涼宗論		2	渡天見仏		2	守敏加持

A 絵巻「弘法大師行状絵」14 世紀成立			B 版本「弘法大師行状記」天保 4 年(1833)刊行			C 弘法大師行状曼荼羅　明治 12 年(1879)成立					
巻 6	1	(東大寺蜂)	巻 6	1	東大寺蜂	第 2 幅	3	生仏不二	第 4 幅	3	守敏封龍
	2	(高雄練行)		2	高雄練行		4	見仏聞法		4	神泉祈雨
	3	(伝教灌頂)		3	伝教灌頂		5	恵果拝謁		5	矢取地蔵
	4	(円堂鎮壇)		4	円堂鎮壇		6	青龍灌頂		6	伊勢参籠
	5	(濁水手水)		5	濁水手水		7	珍賀怨念		7	二間修法
巻 7	1	(南山表請)	巻 7	1	南山表請		8	守敏護法		8	對治疫鬼
	2	(明神衛護)		2	明神衛護		9	護法結界		9	恵果救療
	3	(高野結界)		3	高野結界		10	秘具相伝		10	皇嘉門額
	4	(堂塔草創)		4	堂塔草創		11	恵果入滅		11	親王御影
	5	(心経講讃)		5	心経講讃		12	恵果影現		12	後七日法
巻 8	1	(東寺勅給)	巻 8	1	東寺勅給		13	恵果葬儀		13	門徒遺告
	2	(八幡鎮坐)		2	八幡鎮座		14	帝賜念珠		14	入定留身
	3	(稲荷来影)		3	稲荷来影		15	投擲三鈷		15	奥院奉送
	4	(神泉祈雨)		4	神泉祈雨		16	帰朝著岸		16	天皇葬儀
巻 9	1	(講堂起立)	巻 9	1	講堂起立		17	帰朝奏表		17	贈位官符
	2	(舎利灌浴)		2	舎利灌浴		18	賀水社木		18	慈覚霊夢
	3	(室生修練)		3	室生修練		19	遠救火災		19	贈大師号
巻 10	1	(正月修法)	巻 10	1	正月修法		20	厳嶋出現		20	御廟拝見
	2	(門人遺誡)		2	門人遺誡		21	上表勅許		21	住吉同躰
	3	(真影図画)		3	真影図画		22	加持霊水		22	幡慶夢想
	4	(南山入定)		4	南山入定		23	宇治川舩		23	遺跡影向
巻 11	1	(東寺灌頂)	巻 11	1	東寺灌頂		24	水神求福		24	博陸参詣
	2	(官位追贈)		2	官位追贈		25	久米講経		25	大塔造営
	3	(大師諡号)		3	大師諡号		26	釈迦出現		26	高野臨幸
	4	(博陸参詣)		4	博陸参詣		27	讃州劔山		27	奥院御廟
巻 12	1～3	(仙院臨幸)	巻 12		仙院臨幸		28	善通寺額			
							29	御柴手水			
							30	互御影写			
							31	参詣御庸			
							32	清涼成仏			
							33	製作章疏			

※A 絵巻の標題欄について
絵巻原本に標題は付されていないが、江戸時代に賢賀が作成した標題をカッコ付きで記した。

が分担して執筆した。[31] 絵は、南都絵師祐高法眼・中務少輔巨勢久行・大蔵少輔巨勢行忠・大舎人大進法眼善祐が分担し、[32] こうして多くの人の手によって十二巻もの大部にわたる絵巻が完成した。

全体の構成は【表1】A欄にある通り、計五十九段からなる（巻十二を三段と数えれば計六十一段）。内容については後述することとしたい。

成立後の披覧状況については、前稿でも述べたため詳細は割愛するが、公家・武家・他寺からの求めに応じた貸出の事例が応永十五年（一四〇八）から永正十年（一五一三）までの百数年間に十一件確認できる。そのうちの一例として、「廿一口方評定引付」永享十一年（一四三九）正月二十一日条によれば、「自慶僧（寺）都申云、東山観勝寺大師御絵可書立、寺家御絵為本申出由申云々、披露處、大方他所可渡遣、雖禁（制）結（為）縁興行上者、争可有恬惜哉、可遣（被）、衆儀治定了」とある。[33] 東山観勝寺からの借用申請を受け、東寺の廿一口方は評定を行い、貸与してもさしつかえないと判断を下した。この記事から、絵巻の制作は観智院賢宝が中心となって行われたが、閲覧・借用の可否判断を含む管理は寺家が主体となって行われていたことが確かめられる。

江戸時代に入ると、承応元年（一六五二）に後光明天皇が「弘法大師行状絵」を鑑賞しており、それをきっかけに絵巻を収納する箱の新造や、絵巻の表紙の取替修理が行われた。[34] このことは、真言宗や東寺にとって本絵巻の重要性を再認識する一つの契機となったはずであり、絵巻から版本への展開を後押ししたのではなかろうか。

南北朝時代に成立した絵巻から、江戸時代以降、新たな媒体が派生的に生まれていくことになるが、それに先立って行われたのが標題の作成である。計五十九段からなる絵巻の各段にはもともと標題が記されておらず、宝暦七年（一七五七）十二月、観智院第十三代院主賢賀によって付された。絵巻に付随して伝存する「弘法大師行状絵標題目録」からそれらの標題を知ることができる。

標題によって各段の内容が端的に示され、五十九段ある中から参照したい場面を見つけ出すための便宜が図られた。中世においては、本の入手には書写することが前提となる場合が多く、したがって読書方法としては必然的に「精読」や「通読」が求められた。しかし、版本刊行に伴い、新たに庶民も読者層に加わるとするならば、十二巻もの大部にわたるものを「精読」・「通読」するよりも、必要な場面や関心のある場面のみ「参照」する場

合の方が多くなるであろうことから、標題が付されたのではなかろうか。

内容的に見て比較的読みやすい段もある一方で、世俗社会の人々にとっては難解な段もあることをふまえると、標題作成は決して目立つ業績ではないものの、弘法大師伝に対する理解の深まりを支える重要な作業であったといえる。

なお、東寺蔵「第十三世賢賀像」（絹本著色）の画賛によれば、「享保戊子、巡歴四国、敬礼曩祖之遺跡」とあり、賢賀は標題作成に先立つ享保五年（一七二〇）に、四国を巡礼していることがわかる。また、「（梵字）字記創学鈔第二」（「東寺観智院金剛蔵聖教」二〇七箱一号―二）の享保十三年（一七二八）五月二十五日付奥書には、「四国遍礼沙門権僧正賢賀俗歯四十五載」との記述もある。

後述するが、「弘法大師行状絵」には四国における空海の修行場面も含まれている。観智院院主自らが四国巡礼を通じて空海の修行の跡を辿り、また地方寺院や庶民の信仰のあり様にじかにふれたであろうことも、「弘法大師行状絵」の普及について考え直すきっかけの一つとなったのではなかろうか。

さらに、賢賀は元文五年（一七四〇）八月・九月、醍醐寺光台院で「高祖行状記」の講述を行っている。[35] この「高祖行状記」は絵巻とは別物とみられるが、弘法大師伝の普及に前向きであった賢賀の姿勢が見てとれる。

絵巻から版本への展開例は他宗においても見られ、また「弘法大師行状絵」に先立って出版された弘法大師関係の書物も存在する。東寺蔵「弘法大師行状絵」の出版がそれらに比して時期的に遅いのは、もともとこの絵巻が公家や武家および真言宗寺院などごく限られた範囲での閲覧を前提として編纂され、以後も東寺内でその方針が受け継がれていたことを示唆している。しかし、信仰拡大に弘法大師伝が果たす役割や可能性が東寺内部で再認識され、また後光明天皇から絵巻の価値が認められたこともあって、遅ればせながらも版本の刊行に至ったのではなかろうか。

○天保四年の版本―弘法大師一千年御遠忌―

絵巻「弘法大師行状絵」をもとに江戸時代には版本が生まれ、宝暦八年（一七五八）に刊行されている。宝暦八年は賢賀によって標題が作成された翌年であることから、標題作成は版本刊行のための準備作業であった可能

性が高い。標題が付されてようやく刊行に至ったものの、時期的には享保十九年（一七三四）の弘法大師九百年御遠忌と天明四年（一七八四）の九百五十年御遠忌のちょうど中間にあたり、注目度という観点からすると好機をとらえた刊行とは言い難い。

その後、弘法大師一千年御遠忌に合わせて、その前年にあたる天保四年（一八三三）に版本が刊行されている。五十年ごとに行われる御遠忌の中でも一千年御遠忌は大きな節目であることはいうまでもない。真言宗にとっては弘法大師の功績を広め、信仰を得る絶好の機会であったはずであり、天保の版本は宝暦の版本以上に多くの需要があったと推測される。

以下、より多くの人々の目に触れたであろう天保四年の版本（筆者所持）について見ていくことにする。

本書は袋綴装の冊子で計六冊からなり、各冊には絵巻の二巻分ずつが掲載されている。表紙の題箋には「弘法大師行状記」とあり、第一冊から第五冊の外題下には「地」・「水」・「火」・「風」・「空」の文字が配されている。第一冊目の冒頭には、観智院第十五代院主海宝による頌文と刊行の経緯が次のように記されている。

聖人入懐霊胎有因遍照垂跡徳齋洪鈞
忽昇兜率得侍慈尊管祐罰萬代長存
吾蔵籍中有　弘法大師行状絵詞者十二巻、十輪院住持一音嘗請欲縮写上木流布人間、蓋将述一代行化之徳、答萬人仰慕之意也、近在江戸、遍募緇素、癸巳冬刻、遂成需、余題一言余謝曰、千年遠忌已逼、廟堂墻宇傾頽、未修殆不能蔽風日、何以能張法莚乎、夫興造経営、亦報恩也、豈独供法誦呪而已哉、於是奮然発願、将以期年之間、一新之、夙夜焦心住世間三昧、不得綴文写字、是余之所以辞也、一音懇請不已乃使田玄々聚高祖真蹟中之字、録余舊作二頌以塞其責云、
癸巳仲冬（天保四年）　左大寺学頭沙門海宝沐手謹志

この記述によれば、弘法大師一千年御遠忌に際し、江戸において東寺の末寺十輪院の一音が広く僧侶と俗人に勧募し、「弘法大師行状絵」十二巻を縮写して本書が刊行されたという。刊行後も一音の活躍によって、京都のみならず江戸においても本書が広められたことが推測される。

続いて江戸の金輪寺住持宥欣による序文が記され、そのあとに賢賀によって作成された五十九段分の標題と、絵巻の詞書を清書した人物の一覧が掲載されている。

次に、一音による識語があり、かつて後光明天皇が弘法大師を深く崇敬して絵巻の叡覧があったいきさつなどが述べられ、大師に対する歴代天皇の帰依が強調されている。[36]

これに引き続き、一音による「附言」として五つの条文が記される。その内容は、「此書の詞書もつはら原本に従ひあへてわたくしにこれを改めず」、「原本には真名字に仮名をつくることなしといへども、今童蒙にたよりせんがためにこれを加ふ」、「画は原本のまゝ古意を失はず縮なしてこれを図するのみ」、「原本ハ固より巻軸なれハ画は一段ことの詞書の末にありといへとも、今便に随て是を図す」、「巻の始に附する所の標題は原本にこれなし、中古東寺観智院賢賀僧正見るものゝ便ならんことを思ひてこれを加ふ、いまゝた彼僧正の遺意にまかせて画の段毎にこれをくはふるなり」というもので、末尾には「天保四年癸巳十一月上澣　東寺沙門一音謹識」とある。

右の「附言」の通り、本書の詞書・挿絵はいずれも「原本」すなわち絵巻に従っているが、初学者のために傍訓が施され、また賢賀による段ごとの標題も付されている。賢賀による標題は「見るものゝ便ならんことを思ひて」付されたもので、読者に対する賢賀の配慮は後代にも受け継がれていることがわかる。以上が一音による「附言」である。なお、第六冊目の末尾にも一音による天保四年（一八三三）十一月の跋文がある。

「附言」に続いてようやく巻一が始まるのであるが、全体構成としては【表1】B欄に示した通り、絵巻と同じく全十二巻五十九段で、詞書は絵巻と同文である。挿絵については、前半六巻は京都の仏画工中西誠應が、後半六巻は江戸の日本画師喜多武清が手がけたものである。[37]挿絵は各段に付され、絵巻では一続きだったものがいくつかに分断された形で掲載されている。

挿絵の内容は基本的に絵巻を踏襲しているが、弘法大師をとりまく人物の数などに調整を加えた縮図となっている。詞書には難解な仏教用語も散見されるため、版本を手にした世俗社会の人々、特に庶民が内容理解の拠り所としたのは挿絵と標題であったと推測される。

以上が天保四年の版本の概要である。中世の東寺は絵巻の披覧を無制限に許可していたわけでなかったのに対し、近世には版本の刊行という形で弘法大師伝の流布を押し進めた。言い換えれば、絵巻は東寺との直接的な関係をもつ人々や寺院による限定的な受容であったのに対し、版本は東寺との直接的な関係をもっていない不特定

多数の人々や諸寺院にも向けられたものであり、特に一千年御遠忌に際しては弘法大師伝を広く普及するための媒体として大きな役割を担って刊行された。しかし、詞書の文中に散見される難解な仏教的概念や要語について、その内容理解は読み手に委ねられた。この点が版本の短所であったといえる。

○明治十二年成立の「弘法大師行状曼荼羅」
―弘法大師一千五十年御遠忌―

絵巻から派生して生まれたもう一つの媒体は曼荼羅である。東寺には四幅の「弘法大師行状曼荼羅」が伝存している。各幅とも縦一二四・〇糎、横七八・五糎の大きさで、詞書はなく絵のみが各幅とも上下八列にわたって配置されている。この曼荼羅は、五年後に弘法大師一千五十年御遠忌を控えた明治十二年（一八七九）に制作され、絵解きの要素が強いものとされている。[38] そののち弘法大師一千百年御遠忌にあたる昭和九年（一九三四）には、各場面の解釈をまとめた長谷寶秀氏編『弘法大師行状絵詞伝』が刊行されている。[39]

曼荼羅の全体構成は【表1】C欄に示した通りで、第一幅が三十一場面、第二幅が三十三場面、第三幅が三十一場面、第四幅が二十八場面で、計百二十三場面からなる。絵巻は計五十九段であったのに対し、曼荼羅では場面数が約二倍に増えていることになる。先行する「高祖大師秘密縁起」や「高野大師行状図画」からも複数の場面が取り込まれており、これまでの弘法大師伝絵巻を統合した集大成的な内容といえる。

第四幅の左下には、「于時明治十二年十二月功徳日、為高祖弘法大師一千五拾回御諱報恩謝徳、彫刻行状曼荼羅四幅、奉納東寺宝庫者也」との識語から、御遠忌を記念して制作されたことがわかる。

続いて「願主」として、一岳（阿波国箸蔵寺）・旭雅（京都泉涌寺）・栄厳（京都勧修寺）・乗禅（教王護国寺）・行智（越後国国上寺）・龍暁（教王護国寺）・法遵（讃岐国善通寺）・光範（高野山南蔵院）・徳禅（越中国千光寺）・知息（阿波国薬王寺）・大圓（京都加茂神光院）・眞照（越中国福王寺）の名が列記され、末尾に「真言宗総本山御絵所」として北村半三郎秀隆の名が記される。

願主のうちの一人である教王護国寺乗禅（一八四四―一九一四）は観智院第十八代院主である。明治十七年（一八八四）に東寺で弘法大師一千五十年御遠忌大法会が勤修された際には大阿闍梨を務め、全国に勧募して伽

【表 2】 媒体の派生と背景にある事象

承応元年(1652)	後光明天皇による絵巻「弘法大師行状絵」の鑑賞
貞享(1684-1688)〜元禄(1688-1704)頃	四国遍路の庶民化
享保五年(1720)	観智院第十三代院主賢賀の四国巡歴
宝暦七年(1757)	絵巻「弘法大師行状絵」の標題作成
宝暦八年(1758)	版本の刊行
天保四年(1833)	版本の刊行
天保五年(1834)	弘法大師一千年遠忌、版本の刊行
安政三年(1856)	観智院第十九代院主龍暁の四国修学
明治初年(1868)頃	東寺における御翠簾講の成立
明治十二年(1879)	「弘法大師行状曼荼羅」の成立(五年後に一千五十年御遠忌)
大正末期頃(1920 年代)	東寺における二十一燈会の成立
昭和四年(1929)	東寺における東寺流大師講の成立(詠歌を中心とする講)
昭和九年(1934)	曼荼羅の解説本『弘法大師行状絵詞伝』の刊行

藍の修理を行っている。[40]

同じく願主として名を連ねる教王護国寺龍暁(一八三八―一九一四)は観智院第十九代院主を務めた人物である。龍暁の略歴で注目されるのは、安政三年(一八五六)に阿波・讃岐を訪れて修学していることである。[41] 願主の中には、四国の札所寺院である阿波国薬王寺と讃岐国善通寺が含まれているが、これは龍暁とのつながりによる可能性も想定できる。

以上、各媒体の成立と全体構成を見てきたが、読みやすさや使い勝手など受容者側にも配慮した工夫を施しながら新たな媒体が生み出されてきたことがうかがえる。

では、媒体の展開を社会的背景の中に置き直してみると、いかなることがわかるだろうか。【表2】は背景にあるできごとと合わせて流れを辿ったものである。四国遍路の大衆化により都鄙間における人の移動が活発化し、また講の成立により東寺と庶民との接点が次第に増していくのと相俟って、弘法大師伝を語る媒体の派生が進んでいることが浮き彫りになる。[42]

そうであるならば、各媒体における登場寺院の顔ぶれにも何らかの変化が見られるのであろうか。以下、東寺

以外の登場寺院を挙げていくが（但し日本の寺院に限る）、その際、例えば「石淵の贈僧正」のように地名か寺院名か曖昧な表記がなされている場合は省き、「〜寺」というように寺院名として明記されているもののみ取り上げることとする。

絵巻および版本に登場する寺院は、修禅寺（伊豆国）、神護寺（山城国）、乙訓寺（同）、大覚寺（同）、勧修寺（同）、雲居寺（同）、仁和寺（同）、西寺（同）、法成寺（同）、山階寺（大和国）、大安寺（同）、東大寺（同）、興福寺（同）、弘福寺（同）、菩提寺（同）、妙法寺（同）、仏隆寺（同）、槇尾寺（和泉国）、金剛峯寺（紀伊国）、善通寺（讃岐国）、金剛定寺（土佐国）、観世音寺（筑前国）である。

それに対し、曼荼羅の解説本として刊行された前掲『弘法大師行状絵詞伝』をもとに、各場面に関連する寺院を挙げるならば、恵日寺（陸奥国）、霊山寺（同）、薬師寺（下野国）、中禅寺（同）、修禅寺（伊豆国）、梵釋寺（近江国）、石山寺（同）、神護寺（山城国）、乙訓寺（同）、大覚寺（同）、蓮臺寺（同）、東大寺（大和国）、唐招提寺（同）、岩淵寺（同）、大安寺（同）、興福寺（同）、元興寺（同）、久米寺（同）、転法輪寺（同）、山階寺（同）、般若寺（同）、仏隆寺（同）、槇尾山寺（和泉国）、叡福寺（河内国）、高貴寺（同）、龍泉寺（同）、普光寺（同）、四天王寺（摂津国）、金剛證寺（伊勢国）、金剛峯寺（紀伊国）、善通寺（讃岐国）、曼荼羅寺（同）、出釈迦寺（同）、弥谷寺（同）、神野寺（同）、大龍寺（阿波国）、金剛頂寺（土佐国）、最御崎寺（同）、観世音寺（筑前国）である。

京都・奈良の大寺院が多く登場する絵巻・版本に対し、曼荼羅の場面解説では絵巻・版本には取り上げられていなかった四国の寺院をはじめ、多くの地方寺院にもふれられており、内容に地域的な広がりが見てとれる。昭和九年の弘法大師千百年御遠忌の準備に際しては、広く勧募活動が展開されたという。曼荼羅やその解説に登場する地方寺院も何らかの形で御遠忌に関わった可能性が考えられる。

ここで、地方寺院に伝わる弘法大師伝曼荼羅の一例についても簡単にふれておきたい。筆者が実見したものとしては、石川県輪島市町野町にある佐野寺に伝存する、江戸時代後期成立の曼荼羅五幅がある。第一幅右下には「化者入懐霊胎有因人間垂迹徳齋洪鈞」というように、密宗総本寺学頭権僧正沙門住宝による頌文が記されてい

る。[43]

住宝は天保二年（一八三一）には海宝と改名していることから、この曼荼羅は天保二年以前の成立であることが判明する。海宝は先述の如く、天保四年（一八三三）の版本刊行にも携わった観智院第十五代院主で、天保五年の弘法大師一千年御遠忌に際しては広く諸国に勧募を行ったという。[44]海宝は版本と曼荼羅という二つの媒体によりながら精力的に勧募活動を行い、信仰拡大に努めたのであろう。

もう一つは、同じく輪島市町野町にある金蔵寺が所蔵する明治十二年（一八七九）成立の曼荼羅四幅である。[45]これは弘法大師一千五十年御遠忌に際して制作されたものである。東寺所蔵の曼荼羅の識語を先に示したが、それと同文の識語をもつ。「願主」として教王護国寺龍暁が登場することは前述の通りであるが、龍暁は石川県鹿島郡の出身で、能登の寺院に東寺系統の曼荼羅が伝存しているのは龍暁との関係によるものかもしれない。

なお、関連史料として金蔵寺には、明治時代成立「弘法大師行状曼荼羅略縁起」が伝存している。奥書に「大師行状万タラ新調、絵釈ノ際、綴文書写」とあることから、絵解きが行われていたことがわかり、曼荼羅がどのような使われ方をしていたかを示す一例として注目される。

以上、本章では媒体の派生過程について見てきた。中世の東寺は、不特定多数の人々による絵巻の披覧を認めていなかったのに対し、江戸時代以降には絵巻を版本として刊行することにより、弘法大師伝を広く世俗社会に普及する方向へと転換を図った。伝承を広めようとする意識こそが、情報媒体の新しい形と機能を生み出したのである。

そして、絵巻の制作のみならず、版本・曼荼羅の生成にも観智院院主が関与している。東寺における衆議を経て許可が下りた場合のみ披覧が認められるという限定的な情報共有のあり方から、広く聖俗両社会にわたって情報共有するあり方へと変化していく流れの中で、観智院は重要な役割を果たした。

観智院初代院主杲宝および第二代院主賢宝は、南北朝時代に東寺教学の発展に大きく貢献したことで知られるが、祈祷の面では際立った実績が見られない。その理由の一つには、南北朝時代の観智院は、祈祷の効果を裏づけるための法流の由緒や正統性に対して、十分な社会的

評価が得られていなかったことがあろう。その後における代々の院主も、杲宝・賢宝の教学を継承することには力を注いでいたものの新しい教学は生まれず、目立った祈祷実績も残していない。

しかし、観智院は勧修寺長吏方との密接な関係を築き、中世から近世にかけて院家や法流としての基盤を着実に固めていった。そうした動きが背景にあり、絵巻をもとにした出版をめぐって観智院の意向や発言が寺内で受け入れられるようになっていったのではないだろうか。[46] 真言宗内の教相修学の主導的立場を占めてきた観智院であったが、それにとどまらず、世俗社会に開かれた視線をもって弘法大師伝の普及にも積極的に取り組んでいたことを強調しておきたい。

第三章　個々の場面の内容変化

本章では、第二章で検討した絵巻・版本・曼荼羅について、個々の場面の内容に注目して比較検討を試みる。内容については、弘法大師伝に関する種々の書物や美術作品等も含めて影響関係を分析していかなければならないが、[47] 本稿において網羅的に比較検討することは難しいため、まずは前章で扱った素材を軸に内容を比較し、媒体が展開していく過程における内容変化の傾向を大筋で辿ることとしたい。

以下、まずは絵巻・版本・曼荼羅の三媒体に共通して見られる場面に注目し、内容の異同を検討する。次に、絵巻・版本にはなく曼荼羅のみに見られる場面と、逆に絵巻・版本にはあるが曼荼羅では削除されている場面に注目する。

なお、観智院賢宝は「弘法大師行状絵」の詞書を撰述するにあたり、多くの書物に素材を求めた。応安七年（一三七四）成立の「弘法大師行状要集」は、賢宝が様々な典拠文献から抜き書きした箇所を類聚し、詞書の素材集として編纂したものである。[48] 以下、「弘法大師行状要集」も合わせて参照し、もとの素材に見られる記述が絵巻・版本・曼荼羅ではどのように表現されているのかということも合わせて見ていく。

○絵巻・版本・曼荼羅に共通する場面

一つめの事例は、絵巻「弘法大師行状絵」巻二第二段「聞持修行」である。

本段の概要は、「大師は若い頃から落飾して世俗の諸事をなげうって山から山へと修行を重ねた。阿波の大瀧

嶽に登って虚空蔵法を修していた時、宝剣が壇上に飛来して、菩薩の霊応を表した。また、室戸崎で求聞持法を修していると、明星が大師の口の中に入り、仏の奇特な力を表した」という話である。

本段で注目されるのは、絵巻・版本では「大瀧の嶽」すなわち自然の中での修行風景が描かれているのに対し、曼荼羅の「聞持修行」場面では大龍寺の建築内部から外（大瀧嶽の方向か）を向いて修行する空海の様子が描かれている点である。大龍寺は四国巡礼の札所寺院の一つである（現「太龍寺」）。

【表3】は、「弘法大師行状要集」に抜き書きされた典拠文献の記述および絵巻の詞書、版本の当該段（ただし詞書は絵巻と同文のため省略）、曼荼羅の「聞持修行」場面に関する解説本『弘法大師行状絵詞伝』の記述を示したものである。「弘法大師行状要集」に抜き書きされた典拠文献では、空海が修行した場所はいずれも「大瀧嶽」（「阿国之嶽」・「大瀧之嶺」）となっており、絵巻・版本もこれにしたがって「大瀧の嶽」での修行場面として叙述され、それに合わせて絵が描かれたとみなされる。しかし、曼荼羅では「大龍寺」において修行している様子が描かれており、場面解説でも「大瀧の嶽」での場面が「大龍寺」の場面へとすり替えられているのである。

先行する第一系統の絵巻「高祖大師秘密縁起」巻二第三段には、「阿波国大瀧寺と云所に登て、同法を修し給けるに、悉地の相あらハれて、天より大なる釵とひ来て、瑜伽の壇上に落てけり」とのごとく、「大瀧寺」と記述されており、絵においても大瀧寺と思われる建物内部から外を臨む大師の姿が描かれている。曼荼羅ではこれを参照して「大龍寺」の場面とした可能性が考えられる。

「高祖大師秘密縁起絵」が成立した時期には四国巡礼はまだ大衆化しておらず、あくまで一僧侶の修行場面として四国における空海の足跡が語られているのであるが、四国巡礼が大衆化している中で制作された曼荼羅においては、「高祖大師秘密縁起絵」のように「大瀧寺」を際立たせる方が、札所寺院に関心をもつ民衆の目を引きつけることができると判断したのであろう。こうして東寺所蔵「弘法大師行状絵」とそれに基づく版本では「大瀧の嶽」の場面とされていたのが、「大瀧寺」の場面へと改められたのではなかろうか。[49]

二つめの事例は、絵巻「弘法大師行状絵」巻二第四段「金剛定額」である。

本段の概要は、「室戸崎の近く三十余町のところにあ

【表 3】 絵巻「弘法大師行状絵」巻二第二段「聞持修行」

①「弘法大師行状要集」第一に見られる典拠文献
「一行聞持法呈験徳事〈付大瀧寺誓願捨身行事〉 有書云、名山絶巘之處、嵯峨孤岸之原、遠然独向淹留苦行、或上阿波大瀧嶽修行、或於土佐室生門崎寂暫、心観明星入口、虚空蔵光明照来、顕菩薩之威、現仏法之無二文、」 「三教指帰上云、爰有一沙門、呈余虚空蔵聞持法、其経説、若人依法誦此真言一百萬遍、即得一切教法文義諳記、於焉信大聖之誠言、望飛燄於鑽燧、躋攀阿国大瀧嶽、勤念土州室戸崎、谷不惜響明星来影文、」 「修行記云、或上阿波大瀧嶽、修行虚空蔵法、大釼飛来標菩薩霊応、或於土佐室生門崎、観念求聞持法、明星入口顕相応之勝験文、大師伝同之、」 「行状記云、或人云、明星来影之時、其星光遷留傍岩石、臨暗夜于今放暉光云々、」 「大瀧寺縁起云、攀登阿国之嶽、独経行大瀧之嶺、身除絹綿住本尊之威儀、口断漿穀観自心之瑜伽、練行遙送月、薫修惟累日、勝利曾無悉地未現、爰神童退顧宿習、機未熟、進思来世値遇有馮、不如速捨一生之身命、将加三世之仏力、即遁居於石室、忽擲身於巌洞、于時護法受之以接足、諸仏助之以摩頂、是則捨身預諸天之加護、投身得悉地之果生、一心之懇篤未墜地、五尺之宝釼忽降自天、即飛于室内方立壇上、永留大瀧之聖跡、遂納不動之霊窟、専扶一朝之静謐、永摧三韓之怨讎、当知神通乗之金剛也、豈非虚空蔵之宝釼哉文、〈此記有疑可決之、〉」
②絵巻「弘法大師行状絵」当該段の詞書
「大師弱冠のそのかみ、囂塵をいとひて餝を落し、緇林にましはりて色を壊せしよりこのかた、とこしなへに人事をなけうて、世煩をわすれ、常に幽閑をすみかとして寂黙を心としたまふ、山より山に入、ミねよりみねをうつりて練行年をおくり、薫修日をかさぬ、暁、苔巌のさかしきをすくれは、雲経行の跡をうつミ、夜、蘿洞のかすかなるにねふれは、風、坐禅の窓をとふらふ、煙霞をなめて飢をわすれ、鳥獣に馴て友とす、或は阿波の大瀧の嶽にのほり、虚空蔵の法を修行したまひしに、宝釼壇上にとひ来て、菩薩の霊応をあらハし、〈件の釼、かの山の不動の霊崛にとゝまれり、〉或ハ土佐の室戸の崎にとゝまりて、求聞持の法を観念せしに、明星、口の中に散し入て、仏力の奇異を現せり、則かの明星を海にむかひて吐出したまひしに、その光、水にしつミて、今にいたるまて闇夜に臨に、餘輝なを燦然たり、おほよそ厳冬深雪のさむき夜ハ、ふちのころもをきて精進の道をあらはし、盛夏苦熱のあつき日は、穀漿を絶て懺悔の法を凝ましますこと、朝暮におこたらす、歳月やゝつもれり、」
③版本「弘法大師行状記」当該段
絵巻と同文の詞書あり　（挿絵は絵巻の縮図）
④「弘法大師行状曼荼羅」解説本における当該場面の記述
「これは阿州大龍寺に於て求聞持御修行遊ばされる所であります。大龍寺の御修行は或は御出家前とし、或は御出家後とし、古来両説ありますから、前には俗形とし、今は僧形にして、二度に畫いたものであります。同一の事に對する両説であるから、之を取捨して、何れか其の一に依るべき筈であります。而るに今の図は両説取捨せず、御出家前と御出家後との二度の事として、両説を並べ用ひたのは誤りであります。両説の中何れが正しいかと言ふに、御出家前とするのが、御遺告の文の意にも善くかなうて、正しいのであります。この次にある明星入吐も同様であります。」

※〈　　〉は割注を示す。

【表 4】 絵巻「弘法大師行状絵」巻二第四段「金剛定額」

①「弘法大師行状要集」第一に見られる典拠文献
「一土佐国金剛定寺結界事 行状記云、金剛定寺與室生戸、土州南濱望南海二崎、已東西相去卅有餘町、大師於室生崎雖得悉地、雙崎同依為勝地、被建立一伽藍之處、競発魔縁致妨難、方々種々也、爰為果宿願、於此地遂建立伽藍、題額号金剛定寺、於其悪魔、同国波多郡足摺崎被追籠云々、」
②絵巻「弘法大師行状絵」当該段の詞書
「室戸の崎のかたはらに卅有餘町をさりて勝地あり、大師雲臥のたよりにつきて草履のかよひをなし、常にこの砌にすみ給しとき、宿願をはたさむかために、一の伽藍を立られ、額を金剛定寺と名け給へり、此所に魔縁競発て、種々に障難をなしけり、大師すなはち結界したまひて、悪魔とさま、〻御問答あり、我こゝにあらむかきりハ、汝この砌にのそむへからすと仰られて、大なる楠木のほらに御かたしろをつくり給しかは、其後なかく魔類競事なかりき、かの楠木ハ猶さかへて、枝しけく葉茂して、末の世までつたはりけり、その悪魔ハ同国波多の郡足摺崎に追籠らると申伝たり、むかし釈尊月氏の毒龍を降し給真影を窟内にうつして、隠顕の奇異を示し、今大師土州の悪魔をしりそくる影像を樹下にのこして、古今の勝利をほとこし給、なむそた、仏陀の奇特をあやしまむ、尤又祖師の霊徳をたつとむへきものをや、」
③版本「弘法大師行状記」当該段
詞書は絵巻と同文(挿絵は絵巻の縮図)
④「弘法大師行状曼荼羅」解説本における当該場面の記述
「土佐の国室戸の崎最御崎寺を東寺と云ふ。それより西北海岸三十町ばかりの處に西寺あり、金剛定寺(今は金剛頂寺と書く)と云ふ。此の處も南海に突出した岬で、極めて閑静の處であります。大師室戸の崎の御修行にて既に悉地を得られましたけれども、この處も亦勝地であるから、一の伽藍を建立したいものと思召して、地形を御巡覧遊ばされた時、大なる楠の木があつて、その木のうつろの中に天狗どもが多く集まつて居ました。大師立寄りて試に一夜の宿を乞はれましたところ、天狗答へて「我等は昔から此の處に住んで居る者である。我が党に非ざる者に宿など借す事は出来ない。無駄口をた、かず、何處へなりとも早く行きなさるが善い」と申して、各々羽をた、き嘴を鳴らして大師を怖さうと致しました。大師しばらく立ちながら、真言を唱へ手をこばぬいて居られましたが、唱へられた真言は火界の呪でありましたから、忽に火燄現はれて天狗どもの方へ燃えひろがつて行きました。天狗ども大に驚き、此はかなはぬと云うて、皆散り〻に退散致しました。此に於て大師思ふま、に御修行遊ばされ、尚ほ末代の為めと思召して「我れ此處にあらん間は、汝等此處に近寄るべからず」と仰せられて、彼の楠の木のうつろの中に、自ら御影を造りて安置せられました。その後厳重に結界して一の伽藍を御建立遊ばされ、金剛定寺と名けられました。これより魔障跡を絶ち、仏法繁昌の地となり、その寺今に存して居ります。」

る勝地に、空海は寺を建てて金剛定寺と名づけて住んだが、この地に現れる魔物が空海の修行を妨げた。空海は結界して悪魔と様々な問答をし、自分がここにいる間は来てはならないと言い、大きな楠の洞穴に自身の肖像を安置したところ、以来魔物が現れて妨害することはなくなった」という話である。

【表4】に示したように、「弘法大師行状要集」には、東西に三十余町離れた二つの岬に金剛定寺が建てられたという記事が「行状記」から抄出されており、これを典拠として絵巻・版本にもほぼ同じ記述がなされている。しかし、曼荼羅における「金剛定額」の場面は、絵の構図自体は絵巻を踏襲したものとみられるが、場面解説では「土佐の国室戸の崎最御崎寺を東寺と云ふ。それより西北海岸三十町ばかりの處に西寺あり、金剛定寺（今は金剛頂寺と書く）と云ふ」との如く、金剛定寺とともに四国巡礼の札所寺院である最御崎寺も合わせて挙げられている点が注目される。

また、場面解説では宿の提供をめぐる空海と天狗とのやりとりが記されている（【表4】④下線部）。この一節は典拠文献および絵巻・版本には見られないが、先行する絵巻「高祖大師秘密縁起」巻二第二段に同内容の記述が見られることから、それをもとに取り込まれた可能性が想定できる。[50]

四国には巡礼者に対する「お接待」の文化が存在する。「お接待」とは巡礼者に宿や金品を提供することで、巡礼者に対する歓待は空海を歓待するのに等しいという認識があるという。[51] 宿の提供をめぐる一節は、こうした「お接待」の慣習を反映して盛り込まれたものとも考えられる。媒体が展開していく中で、四国巡礼の大衆化をふまえた説明が加えられている点が注目される。

○絵巻・版本にはなく曼荼羅のみに見られる場面

絵巻や版本にはなく、曼荼羅のみに見られる場面の一例として、第三幅の第十七場面「江嶋弁天」が挙げられる。[52] この場面は、大師が相模国江島の龍窟内で修行した時に、天照大神・春日大明神・八幡大菩薩の諸神の像を窟内に安置したという話である。江戸中期以降、大山詣と並んで江島詣が流行したことをふまえ、江島弁天と弘法大師との関わりを示す話を盛り込むことで、世俗社会の人々の関心を引きつけようとしたものと考えられる。

「江嶋弁天」は東寺所蔵「弘法大師行状絵」だけでなく、先行する絵巻にも見られない場面である。では、い

かなる話の流れの中にこの場面が取り込まれたのか、前後の段を合わせて見てみよう。第三幅の第十一場面から第二十場面では、諸国をめぐる空海の足跡が語られ、国から国への移動が顕著である。場面を追って空海の足取りを辿ると次のようになる。

⑪「二人弟子」（土佐国）→⑫「大峯修行」（大和国）→⑬「小児蘇生」（和泉国）→⑭「龍泉涌出」（河内国）→⑮「了知牛語」（摂津国）→⑯「日想観法」（摂津国）→⑰「江嶋弁天」（相模国）→⑱「禅僧与油」（越後国）→⑲「恵日草創」（陸奥国）→⑳「霊山結界」（陸奥国）

前後の場面と合わせて順に辿ると、次第に北上していく流れの中に「江嶋弁天」の場面が組みこまれていることがわかる。

【図】に示すように、曼荼羅の場合、各幅とも画面右下から始まって各列とも右から左へと場面が進行し、視線が左右に振れながら下段から上段へと向かうという特性がある。このことをふまえ、右に示した空海の足取りを地図上で辿ると、第十一場面から第二十場面にかけては、国から国へと移動していく地理的動線と、曼荼羅画面の上方に向かって進む視線の動きがおおよそ合致するのである。

第十七場面「江嶋弁天」以外は、先行する絵巻「高野大師行状図画」（十巻本）から取り込まれたものと考えられる。「二人弟子」と「禅僧与油」は「高野大師行状図画」巻五から、「大峯修行」・「小児蘇生」・「龍泉涌出」・「了知牛語」・「日想観法」・「恵日草創」・「霊山結界」はいずれも「同」巻六から取り入れられたとみなされる。

では、「高野大師行状図画」巻六では、どのような話の流れとなっているのであろうか。順に辿ると次の通りである。

「恵日草創」（陸奥国）→「霊山結界」（陸奥国）→「釈尊出現」（讃岐国）→「讃州釵山」（讃岐国）→「善通寺額」（讃岐国）→「土州朽橋」（土佐国）→「天地合字」（播磨国）→「大峯修行」（大和国）→「小児活生」（和泉国）→「了知牛語」（摂津国）→「西門日想」（摂津国）→「龍泉涌出」（河内国）

陸奥国から讃岐国へと話の舞台が飛び、場面展開に若干唐突な感があるが、おおよそ地方から中央へと向かう足取りとなっており、流れが曼荼羅と異なっている。

「高野大師行状図画」の内容を曼荼羅に取り込むにあたり、話が進むにつれて下から上へと視点が移っていく

【図】「弘法大師行状曼荼羅」第三幅の場面配置

注：和泉国・河内国・摂津国は接しているため、
ひとまとまりとして矢印を付した。

曼荼羅という媒体の特性を活かし、話の流れを入れ替えて北上する流れとした可能性が考えられる。そして、摂津国の四天王寺が登場する第十六場面「日想観法」と、越後国草生津にある遺跡についても言及する「禅僧与油」との間に、相模国を舞台とする「江嶋弁天」の場面を挿入し、地理的にも不自然さを感じさせない流れを作ったのではなかろうか。これは、曼荼羅を見る人々や絵解きを聞く人々に、各地をめぐって修行する空海の足取りを追体験させるための工夫の一つとも考えられる。

情報史の視点からこうした場面展開の異同についていえば、新しい情報が取り込まれる過程で、旧来からの枠組み自体が変化した事例として注目される。

○絵巻・版本にはあるが曼荼羅では削除された場面

絵巻・版本にはあるが、曼荼羅においては削除された場面として、「弘法大師行状絵」巻十一第一段「東寺灌頂」がある。本段は、大師の入定後、東寺灌頂院を舞台に創始された伝法灌頂・結縁灌頂に関する場面である。空海の門弟の一人である実恵から真紹に対する伝法灌頂や、歴代天皇に授けられた灌頂に関して語られている。

特に東寺の伝法灌頂は、真言宗の阿闍梨を生み出して官許を得るために創始された法会であり、東寺にとって「東寺灌頂」の段は由緒と権威性を顕示する上で極めて重要な意味をもっていたはずである。しかし、真言密教における嫡流を標榜する醍醐寺や仁和寺が事相面で台頭してからは、東寺で伝法灌頂を受けて阿闍梨としての官許を受ける意義は希薄化していた。また、「東寺灌頂」の場面は庶民とは直接的な関わりが薄い内容であることからも、曼荼羅の制作にあたっては削除された可能性が考えられる。

以上、第三章ではいくつかの場面を取り上げて、その内容と変化の一端を辿ってきたが、個々の場面に関しても、地方寺院や庶民に対する東寺側の歩み寄りを反映した内容の変化や工夫の跡が見てとれる。

版本は多くの人々の手に渡ることで、弘法大師伝の広まりを支える媒体として機能した。一方、曼荼羅は大量生産されないものの、僧侶と俗人が一堂に会して、大画面を前に大勢で弘法大師伝を共有することが可能であり、聖俗両社会を直接結びつける役割を担って生成されたと考えられる。しかも、曼荼羅の場合は、僧侶が介在することで難解な仏教的概念を対面でわかりやすく伝えることも可能である。この点は絵巻や版本に対して曼荼羅と

いう媒体がもつ大きな強みであり、版本と曼荼羅はそれぞれの機能や利点を活かして相互補完的に用いられたといえるのではないだろうか。

おわりに

以上、本稿のまとめとして、情報史の視点から見た弘法大師伝について再度整理しておきたい。

第一に、情報の公開性という観点から見ると、中世において「弘法大師行状絵」は東寺の寺家によって披覧の可否も含めて管理されていたが、近世に至って版本の刊行という形で公開されたことにより、庶民を含む東寺外の人々にとっても閲覧・入手が可能となった。

しかしながら、詞書の文中には難解な語句や仏教的概念も少なからず含まれているため、世俗社会の人々、特に庶民にとっては必ずしも平易なものではなかったと考えられる。

そうした中で、絵巻から絵のみを抽出して配列した曼荼羅が生み出された。そして、僧侶の絵解きによる聖俗両社会の直接的な橋渡しと、大画面による大勢での情報共有を可能にするための下地が整えられた。

第二に、情報を扱う主体という観点から見れば、絵巻「弘法大師行状絵」の「管理」主体は東寺の寺家方であったが、空海に関する様々な書物の中から絵巻に必要な部分を抽出し、詞書を撰述したのは観智院院主であった。その後も標題作成や版本刊行、曼荼羅の生成というように、観智院院主は庶民も視野に入れて弘法大師伝の普及を進めたのであり、情報の「発掘」・「統合化」・「普及」者としての観智院院主の貢献は大きい。

第三に、情報が置かれた場という観点から見れば、絵巻「弘法大師行状絵」は京都で生まれ、京都を主とする限られた範囲での受容であったのに対し、媒体派生により弘法大師伝の普及は格段に進み、地方寺院の間にも広まった。

第四に、人の動きと情報との関連性という観点から見ると、江戸時代には四国巡礼が大衆化し、こうした社会的状況は弘法大師伝の普及へと東寺を突き動かす一つの原動力となったと考えられる。巡礼を通じて都鄙間における人の移動や交流が生まれ、従来は伝承を受容する側であった地方寺院やその檀家・近隣住民が、地方に伝わる伝承の提供者となり、絵巻から派生的に生まれた媒体の内容に影響を及ぼした可能性も考えられよう。

第五に、弘法大師伝と寺院経済との関連性という観点

から見ると、版本刊行と曼荼羅の生成は、弘法大師御遠忌に伴う勧募活動と密接に関わっていることから、経済的な面で観智院院主が果たした役割も大きいと考えられる。但し、この点については近世の出版事情と合わせて今後の課題としたい。

真言密教の教義は世俗社会の人々にとって難解なものであり、そのため教義に対する関心は、後宇多天皇などの例外を除けば決して強くはなかったが、絵や詞書によっていきいきと表現される弘法大師伝は、庶民にとっても魅力的なものとして受け入れられ、信仰の裾野を広げていく上で伝承は大きな影響力をもったと考えられる。観智院は伝承のもつ可能性に期待し、絵巻をもとにした新たな媒体による教線の拡大に積極的に取り組むに至ったのであろう。

「一宗の勧学院」とも呼ばれ、真言宗の教学拠点として知られる観智院であるが、修学面だけでなく信仰の広まりにも大きく貢献した点は軽視できない。絵巻から派生して新たに生み出された版本や曼荼羅は、宗祖弘法大師に対する世俗社会の関心をひきつけ、真言宗の存続と発展を支えるものとして重要な機能を果たしたのである。

以上のように、弘法大師の行跡は、時代性や地域性を反映した様々な伝承に彩られながら語られ、弘法大師伝を通じて真言宗の歴史も表現され、発信されてきた。多彩な伝承をいかに活用して祖師伝が編まれ、そして広められていったのか、情報史の視点から探ることは聖俗両社会のつながりを明らかにする上で有効であろう。

一方で、近年、真言宗寺院における聖教調査の進展に伴い、付法や祈祷といった宗教的活動の実態や寺院の内部構造の解明が進められている[53]。文書・記録・聖教に基づく真言宗の実態解明と合わせて、情報史の視点から祖師伝および真言宗史がいかに語られたかを検討することで、史実と伝承の双方向から各時代における真言宗のあり方を明らかにすることを今後の目標として掲げておきたい。

註

(1) 難波田徹氏「社寺参詣と飲茶風俗」(『淡交』二六一号、一九八六年)、今谷明氏「一服一銭の茶」(『京都・一五四七年』平凡社、一九八八年)、丹生谷哲一氏「一服一銭茶小考」(『立命館文学』五〇九号、一九八八年)、吉村亨氏「一服一銭と門前の茶屋」(『淡交』五一五号、一九八九年)、京都府立総合資料館編『東寺百合文書にみる日本の中世』(京都新聞社、一九九八年)等を参照。また、庶民との接点として、橋本初子氏『中世東寺と弘法大師信

仰』（思文閣出版、一九九〇年）第五章第一節「中世東寺の光明真言講について」によれば、嘉慶元年（一三八七）頃に成立した光明真言講も、東寺と洛中洛外の住人との接点としてあったことが指摘されている。

（2）新見康子氏「東寺御影堂と庶民信仰―東寺と講―」（東寺宝物館展示図録『東寺と弘法大師信仰』（二〇〇一年）所収）を参照。

（3）加藤あかね氏「東寺と『弘法さん』―にぎわいを生み出す都市空間―」（前掲『東寺と弘法大師信仰』所収）を参照。

（4）刊本としては、御誕生千二百年記念出版委員会『弘法大師行状絵巻』（八宝堂、一九七三年）、御遠忌千百五十年記念出版会編『弘法大師行状絵巻』（東京美術、一九八一年）、小松茂美氏編『続日本絵巻大成 五・六 弘法大師行状絵詞』（中央公論社、一九八二・一九八三年）、小松茂美氏編『続日本の絵巻 一〇・一一 弘法大師行状絵詞上・下』（中央公論社、一九九〇年）がある。また、東寺蔵「弘法大師行状絵」を真正面から取り上げた東寺宝物館の展示図録『弘法大師行状絵巻の世界―永遠への飛翔―』（二〇〇〇年）がある。

（5）松岡正剛氏『世界情報文化史講義 情報の歴史を読む』（NTT出版、一九九七年）によれば、情報の一般的定義として、「メッセージが読みとれるもの」、「区別でき、差異のあるもの」、「事に柄が読めるもの」とされ、科学的定義として、「生物学的情報＝遺伝子情報、神経情報、感覚情報」、「物理学的情報＝エントロピーの逆数で計算する値」、「電気通信工学的情報＝雑音を排除したメッセージ信号」とされている。

（6）『歴史学研究』六二五号・六二七号（一九九一年）特集「情報と歴史学」（Ⅰ）（Ⅱ）。

（7）『歴史学研究』七一六号（一九九八年）。

（8）『立教大学日本学研究所年報』五号（二〇〇六年）。

（9）西岡芳文氏「『情報史』の構図―日本中世を中心として―」（『歴史学研究』六二五号、一九九一年）。

（10）西岡芳文氏「日本中世の〈情報〉と〈知識〉」（『歴史学研究』七一六号、一九九八年）。

（11）西岡芳文氏「富士山をめぐる知識と言説―中世情報史の視点から―」（『立教大学日本学研究所年報』五号、二〇〇六年）。

（12）具体的な切り口を模索するにあたり、海外の研究事例ではあるが、「歴史記述の歴史」をテーマとしているイギリスの歴史学者・ピーター・バーク氏の著書『知識の社会史 知と情報はいかにして商品化したか』（井山弘幸氏・城戸淳氏訳、新曜社、二〇〇四年）を参照した。近代初期のヨーロッパにおける知識の歴史を研究対象とする本書では、知識を「生業とする」、「確立する」、「位置づける」、「分類する」、「管理する」、「売る」、「獲得する」、「信ずることと疑うこと」というように、主体的な関与の仕方によって知識をとらえているのが特徴である。なお、バーク氏のいう「近代初期」とは、一四五〇年頃のドイツにおける活版印刷の発明から、一七五〇年代以降の『百科全書』刊行までの時代を指している。

(13) 知識の属性と所有、言い換えれば公共・私有の区別、商品化の可否といったバーク氏の視点は参考になる。

(14) 「弘法大師行状絵」の編纂過程の一端については、拙稿「東寺蔵『弘法大師行状絵』の詞書―観智院賢宝の編纂意図―」(『佛教史學研究』第五七巻第二号、二〇一五年)で検討した。バーク氏前掲書によれば、「都市などで行われる知識の体系化は、大がかりな手の込んだ作業、すなわち『処理』の一部にすぎない。この処理には、編纂、調査、校訂、翻訳、注釈、批評、総合、そして、当時の言葉を使えば『縮図化と方式化』が含まれていた。全体を一連の流れ作業として記述してもよい」とされる(一一五・一一六頁)。

(15) 武内孝善氏『弘法大師 伝承と史実 絵伝を読み解く』(朱鷺出版、二〇〇八年)。古代・中世には、弘法大師に関する多くの伝承が生み出され、聖俗両社会において広まったが、これらの伝承は主に法流の由緒や正統性、祈祷の権威性などを裏づけ、顕示するという役割を担って生み出され、用いられたものと考えられる。よって、江戸時代以降、庶民の間に流布した諸々の伝説とは、機能の面から見ると必ずしも同質とはいえない部分もあるのではなかろうか。この点については、機会を改めて考察したい。

(16) 梅津次郎氏「弘法大師絵巻の諸本について」(御遠忌一千五十年記念出版会編『弘法大師行状絵巻』(東京美術、一九八一年)所収)。

(17) 奥書によれば、安楽寿院蔵本は応仁二年(一四六八)に河内国神尾寺の衆徒が清瀧寺より借用して書写したものであるという。

(18) 梅津次郎氏「東寺本弘法大師絵伝の成立」(『美術研究』八四号、一九三八年)。のち同氏『絵巻物叢考』(中央公論美術出版、一九六八年)に所収。

(19) 宮次男氏「東寺本弘法大師行状絵巻―特に第十一巻第一段の成立をめぐって―」(『美術研究』二九九号、一九七五年)。

(20) 宮次男氏「東寺の弘法大師行状絵巻について」(御遠忌一千五十年記念出版会編『弘法大師行状絵巻』(東京美術、一九八一年)解説)。

(21) 塩出貴美子氏「角屋本『弘法大師行状絵巻』再考―東寺本との図様比較を中心に―」(『奈良大学紀要』第二一号、一九九三年)。塩出氏には弘法大師伝絵に関する多数の論文があるが、東寺系統のものについて論じられたものとしては、「浄土寺蔵『弘法大師絵伝』考―絵巻から掛幅へ 第七幅と第八幅の場合―」(『奈良大学紀要』第三一号、二〇〇三年)、「『弘法大師行状絵巻』考―久保惣記念美術館本について―」(『大和文華』第一一八号、二〇〇八年)、「長楽寺蔵『弘法大師行状曼荼羅』考―東寺本系大師伝絵の一例として―」(『奈良大学紀要』第四四号、二〇一六年)などがある。

(22) 新見康子氏「東寺所蔵『弘法大師行状絵』の制作過程―詞書の編纂を中心に―」(中野玄三氏・加須屋誠氏・上川通夫氏編『方法としての仏教文化史―ヒト・モノ・イメージの歴史学―』(勉誠出版、二〇一〇年)所収)。

(23) 拙稿「描かれた東寺の灌頂―『弘法大師行状絵』の一齣―」(遠藤基郎氏編『生活と文化の歴史学2年中行事・仏事・神事』(竹林舎、二〇一三年)所収)。
(24) 拙稿「東寺蔵『弘法大師行状絵』の詞書―観智院賢宝の編纂意図―」(『佛教史學研究』第五七巻第二号、二〇一五年)。
(25) 藤原重雄氏「東寺本『弘法大師行状絵巻』の灌頂行列図」(久留島浩氏編『描かれた行列―武士・異国・祭礼』東京大学出版会、二〇一五年所収)。
(26) 東寺蔵「弘法大師行状絵」の成立については、梅津次郎氏・宮次男氏・塩出貴美子氏・新見康子氏の前掲論文によって明らかにされている。
(27) 新見康子氏前掲論文「東寺所蔵『弘法大師行状絵』の制作過程―詞書の編纂を中心に―」による。
(28) 「大師御絵用途注文」(「東寺百合文書」モ函三〇号)。
(29) 宮次男氏前掲論文「東寺本弘法大師行状絵巻―特に第十一巻第一段の成立をめぐって―」、新見康子氏前掲論文「東寺所蔵『弘法大師行状絵』の制作過程―詞書の編纂を中心に―」を参照。
(30) 「東寺百合文書」ム函四九号。
(31) 絵巻に付属している「弘法大師行状絵詞筆者目録」による。
(32) 前掲「大師御絵用途注文」による。
(33) 「東寺百合文書」ち函一五号「二十一口方評定引付」。
(34) 弘法大師行状絵箱の外箱底銘による。前掲『弘法大師行状絵巻の世界―永遠への飛翔―』に写真が掲載されている。

(35) 「梵字伊呂波」(「東寺観智院金剛蔵聖教」二〇二箱一三号)の奥書による。
(36) 一音の識語は、「右、所蔵の本のまゝ、筆者目録をこゝにいたしたり、さてこの目録は後光明院のみかとわか大師を御崇仰ふかくおはしまして、行状記を　聖覧あり、叡感あさからさるあまり、装飾をさへ加へられ、内外の箱まて新につくられ、尚も青蓮院の意は筆者尊応准后の由緒もおはすをおほしめされ、目録をあらたに写し給はんと仰せて、同く御寄納あり、かくはかり歴世帝王の御崇信をことさらに継述し給ふ事、かのミかとハ朱子の経藝好ませ給ふ御しるしとおもハれ、かつは本寺にかの帝の宸翰もて造られし観音薩埵の摶換も宮人よりよせられし事たにあれは、儒釈双美をほしいまゝに領受し給ひしも推てしるへし、かけまくもかしこき御心のうるはしきあまりに密教帰仰のかしこき御あと人のしるへきにもあらねハ、こゝにちなみて仁王の付嘱いちしるしきさまをくハしく書のするにそ」との内容である。
(37) 中西誠應の業績については、白木菜保子氏「逸見一信筆『五百羅漢図』と近世後期における戒律復興」(『美術史』一七九、第五十六巻(一)、二〇一五年)に論じられており、近世後期における戒律復興の流れの中で、袈裟の着用法を指図で示した解説書『畫像須知』を撰述した業績があることが述べられている。
(38) 前掲『弘法大師行状絵巻の世界―永遠への飛翔―』に、写真とともに紹介されている。

(39) 長谷寶秀氏『弘法大師行状絵詞伝』(六大新報社、一九三四年)。

(40) 東寺宝物館展示図録『東寺観智院の歴史と美術―名宝の美 聖教の精華―』(二〇〇三年)による。

(41) 前掲『東寺観智院の歴史と美術―名宝の美 聖教の精華―』による。なお、弘法大師一千五十年御遠忌にあたっては、北陸地方や岡山の末寺に勧進を行い、東寺の諸堂の修復につとめたという。また、明治十八年(一八八五)には泉涌寺長老となり、観智院と兼務したとされる。曼荼羅の願主の中に泉涌寺旭雅が含まれているのも、龍暁との関係性によるものであるとも推測される。

(42) 四国遍路の庶民化については、頼富本宏氏『四国遍路とはなにか』(角川学芸出版、二〇〇九年)等を参照した。東寺の講については、新見康子氏前掲「東寺御影堂と庶民信仰―東寺と講―」による。なお、大正二年(一九一三)に刊行された「弘法大師行状記図會」も絵巻「弘法大師行状絵」と同文の詞書をもつ。下巻末尾には「弘法大師四国八十八ヶ所山開き」と題して弘法大師和讃が掲載されており、四国巡礼に出向く人々が本書を手にしたことが推測される。

(43) 神奈川大学日本常民文化研究所調査報告『奥能登における真言宗寺院の年中行事を中心とした民俗調査』(常民文化奨励研究調査報告書、二〇一四年)。

(44) 前掲『東寺観智院の歴史と美術―名宝の美 聖教の精華―』による。

(45) 前掲『奥能登における真言宗寺院の年中行事を中心とした民俗調査』に、畠山聡氏による解説がある。なお、筆者も金蔵寺の調査に参加させていただき、曼荼羅の原本を拝見させていただいた。金蔵寺にはこの他にも、嘉永六年(一八五三)の曼荼羅五幅があり、奥書に「嘉永六年清和月 仁和皇宮僧正義天」、裏書に「琢磨法眼孫筆嗣、皇都御畫所禁裏御内森田将監秦易信拝写」とある。

(46) 中世から近世にかけての観智院における院家や法流の相承実態については、別稿を準備中である。なお、近世の東寺や観智院が、絵師・書肆といかなる関係にあったかということに関しても、観智院の内実をふまえた上で、今後検討したい。

(47) 前掲『弘法大師行状絵巻の世界―永遠への飛翔―』に掲載される新見康子氏「総説 弘法大師行状絵―歴史としての可能性―」によれば、江戸時代になると、寺家所蔵の絵巻「弘法大師行状絵」が転写され、年預方や聖方の組織、あるいは子院においても所蔵されるようになったという。今後はこれらの絵巻も含めて検討していく必要がある。

(48) 長谷寶秀氏『弘法大師伝全集』第三巻(ピタカ、一九九七年)所収。奥書には、「自応安七年正月下旬令起草、至同三月廿一日夜検籍、朝夕執翰、全部終篇章」とあり、応安七年(一三七四)の正月から約二ヶ月で完成させていることがわかる。

(49) 「高祖大師秘密縁起」がいかなる目的のために制作されたのかということについても、「高野大師行状図画」や東寺蔵「弘法大師行状絵」の内容と比較しながら検討し

なければならないが、この点については今後の課題としたい。

(50)「高祖大師秘密縁起」巻二第二段に、「大師このうつろに立よりて、心みに宿をかり給ふニ、天狗答ていわく、我昔より此所ニ、住来れる事久、我党に非さらん者、何のましらひにかや(宿)とを借申へきやと希有の事の給君哉と、各羽をたゝき、はしをならして、とかめのゝしるに、大師暫こまぬきて立給へる、火界呪なりけれハ、火焔たちまちに現する時、天狗共無益なりとて皆退散ぬ」とある。

(51)森正人氏『四国遍路』(中公新書、二〇一四年)等を参照。

(52)その他、第二幅の第二十場面「厳島出現」や、第四幅の第六場面「伊勢参籠」などが新たに加えられている。

(53)永村眞氏『中世寺院史料論』(吉川弘文館、二〇〇〇年)、藤井雅子氏『中世醍醐寺と真言密教』(勉誠出版、二〇〇八年)、拙著『中世密教寺院と修法』(勉誠出版、二〇〇八年)ほか。

【付記】本研究はJSPS科研費JP一五K一六八三六の助成を受けたものです。